

町では、今後も根室本線対策協議会による検討をはじめ、関係機関への要請活動を通じて、地域の発展に必要不可欠な鉄道の維持・存続に向けた取り組みを進めていきます。

鉄道は、本町だけに限られる問題ではないため、全体としての問題解決に向けた努力、改善や改革が必要になります。利用者の向上など地域としての協力も必要です。

町民の皆さんも、家族や友人との旅行などによりJRを積極的に利用いただくとともに、鉄道の未来を守るため、地域の公共交通の維持・確保のために、地元の熱意を結集していきましょ。

利便性向上、利用促進の鍵

町では、根室本線利用者アンケートモニター制度を創設しました。第1回は、7月21日から8月20日までの間に乗車する方を対象に実施しています。

第2回は9月22日～10月22日の間で乗車する方を対象とし、第3回は来年1月から2月の乗車を対象に実施を予定しています。

根室線の利便性向上、利用促進のための皆さんのご意見・ご提案をお待ちしています。

詳しくは、役場地域戦略室までお問い合わせください。(電話641-0521)

◆存続するための方法(複数回答)

JR北海道の経営努力	沿線住民の利用協力	国や北海道などの経済的支援
10	6	11
沿線自治体の経済的支援	各JR統合など国策による抜本的見直し	よくわからない
6	8	0

◆根室線存続問題に関する意見(主なもの)

- ・被災区間と老朽化した施設の復旧を条件として「上下分離」も一つの選択肢ではないか。
- ・富良野から多くの観光客が乗車していたので、観光面では必要だと思う。
- ・駅前開発により道の駅との相乗効果を考えてみてはどうか。
- ・北海道のあちこちで鉄道がなくなり、バスの転換が増えているが、鉄道が走らなくなると、小さな町は衰退していくのが目に見える。バスの良さもたくさんあるが、開拓の北海道だからこそ列車の存続が必要。地域の日常生活に駅、列車が身近なものとして考えられるよう駅を中心とした駅前開発に期待する。
- ・レールあってこそその再建。道内にたくさんある観光資源を鉄道で取り込む経営努力を望む。
- ・儲からないからやめるは違うと思う。だんだん線路をなくしたら、余計不便になって乗る人がいなくなると思う。
- ・通勤通学に利用している方がいたので廃止は困ると思う。
- ・バスのみでも2時間ぐらいでいけるのなら無理して大金を使って根室線を存続しなくてもよいと思う。バスなどの足の確保さえ存続してくれば。
- ・国が北海道の鉄道路線を守る責任を果たすためのあらゆる努力をすべき。
- ・旭川、富良野方面からの観光客は今後増えると思うので、東鹿越～新得間の復旧工事を早くやるべき。

第1回JR根室線(新得—富良野間)利用モニターアンケート集計結果(一部抜粋)

◆モニターの年齢

20代以下	30代	40代	50代	60代	70代以上
1	0	4	3	4	6

◆根室線の利用頻度

ほぼ毎日	週1回程度	月数回程度	年数回程度	数年に1回程度	ほぼ利用しない
0	0	0	6	6	6

※利用頻度の理由(主なもの)

- ・利用する用事がない
- ・観光にしか利用しない
- ・車を利用するため
- ・帰省のため

◆根室線の利用目的

通勤または通学	通院	観光	出張	その他
0	0	13	1	6

※「その他」の主なもの

- ・私用
- ・鉄道を趣味とするため

◆列車の利便性(乗継等)

良い	以前より良くなった	変わらない	以前より悪くなった	悪い
6	1	1	5	2

※自由記載(主なもの)

- ・新得から帯広方面への列車の接続が悪い
- ・従来ならばそのまま良かったが、乗り換えが余分だ
- ・代行バスへの乗継が悪い
- ・バスの中では話づらいが、列車では向かい合って話せる
- ・大きな荷物を持つ人は、列車のみの場合に比べてバスへの積み下ろしが大変そう

◆根室線の存続は必要か

存続が必要	存続は不要	よくわからない
13	1	2

利用者がいる限りは鉄道路線を継続してほしい

旧新得機関区職員 毛利幸一さん (79)

毛利さんは、昭和32年に新得機関区に就職し、33年間鉄道生活を送ってきました。整備士として就職し、機関助手としてかま焚きをやった後試験を受け、機関士としてSLやディーゼル車を運転していたそうです。

「小さい頃は、親が保線区というところもあったが、当時は機関車が当たり前で日常だった。たまに乗せてもらったりと、鉄道に縁があったのかな」と子どもの頃の記憶をたどっていました。

「仕事の中で一番の苦勞は、機関士のかま焚きの仕事かな。狩勝峠は行きはずつと登りだから、蒸気上げ(機関車のパワーを上げる)のために1トン、2トンの量がある石炭をシヨベルで入れるから冬でも汗をかきながらやってたよ」と当時の仕事を振り返っていました。

蒸気上げのために多くの石炭を入れ、煙も多くなりますが、急な上り坂とトンネルの影響で煙は外に逃げず、客車の中に煙や石炭の燃えかすが入ってくるのも珍しくなかったそうです。「SLならではの課題だね」と笑っていました。

峠を越えるのは大変だから今は近

代的な車両に変わっているけど、昔はSLが走っていて、狩勝峠という難所中の難所を越え、鉄道の町と呼ばれた形を残してほしい」と鉄道の町という名前をなんとか残したいとの気持ちも語っていました。

新得山スキー場下の広場に展示されているSLの化粧直しを新得機友会が行っていました。結成当初は60人いたメンバーも20人程度と少なくなり、今年で活動は終了。今後は、どうにかその形を残そうと方法を考えているそうです。

「現在は、鉄道も手足をまがれるように減少してきている。それも時の流れかなと思うが、人は減ったとしても利用する人はゼロではない。線路が目的の地まで繋がるよう、利用する人がいる限り、不便を感じる人がいないようにしてほしい」と期待を込めていました。

「鉄道のない町というのは、全体的にしぼんでいく。鉄道のためにラッピング列車などを運行するなどの手もあると思うが、それを一時的盛り上がりにはせず、それを継続できる案がほしい。どうPRしていくかが大事」と鉄道の未来についても考えているそうです。

現在、根室本線の富良野—新得間は代替バスが運行されていますが、鉄道の路線は維持してほしいと考えを示してくれました。